

りょうぜん天蚕の会だより

【第2・3合併号】



発行責任者 りょうぜん天蚕の会々長 柳沼 泰衛（電話・FAX 024-586-3004）

会設立後の活動を振り返って

会長 柳沼泰衛

昨年2月設立後の1年はあっという間に過ぎ2年目の半ばにきていますが、会員皆様のご支援により、繭生産量3,000粒以上を達成し、2年目は前年を上回る生産ができそうな見通しです。

また地域活性化につながる天蚕飼育を通じた親子体験教室、グリーンツーリズム交流会、あるいは天蚕繭繰糸機による初めての糸繰りを会員相互の研究も兼ね実施した結果、素晴らしい風合いの天蚕糸が紡がれたことなど、その活動は順調であったと考えています。

さらに課題であった天蚕繭工芸品の商品化による特産品の創出についても、様々な試作研究の結果、アクセサリ製品で高い評価を受け、販売も可能となり、天蚕繭の付加価値向上に大きな貢献が出来るようになります。

今後は県の地域総合サポート事業などの補助支援を受けながら、地域興しのために新しい活動に取り組む考えています。皆様方の絶大なご協力をよろしくお願いします。



霊山町内各小学校へ天蚕飼育教材の提供

昨年度から町内掛田・小国・泉原・大石の各小学校に天蚕2匹程度をつけた飼育樹であるエゾノキヌヤナギの植木鉢を2～4鉢を寄贈し、総合学習や理科学習の時間に、柳沼会長や八島事務局長が講師となって天蚕の観察と飼育について特別授業を開いてきました。

この授業では、天蚕の習性やどのように飼育しているかなど、会長の天真爛漫な語りに教室は盛り上がり、子供たちにとって天蚕への興味が大変湧いたようでした。



また、霊山町の養蚕の歴史にも触れ、横浜から輸出されていた「掛田折返し糸」が世界ブランド名であったこと、日本最初の民間教育機関「養蚕伝習所」開設の町であったことや日本最古の養蚕教育書「養蚕茶話記」を著した佐藤友信は霊山町出身者であることなど、自分たちの祖先のすばらしさと誇りを感じ勉学に励むよう、私たちの気持ちを子供たちに伝えることができました。

子供たちからの感想文は今回号に記載されてますのでご覧ください。（柳沼、八島）

小学校天蚕学習会を通じて（子供達からの感想より）

「天さんを学習して」 八島美鈴さん

わたしは、天さんを見たことがないので、「天さん」ってなんだろうと思っていました。緑色の大きな天さんを見たときは、びっくりしました。かつて、りょうぜんではかいこ様と言われ、昔はたくさん糸を作って売っていたそうです。わたしは、初めて知りました。



理科の学習で、トンボはたまご、よう虫、せい虫で、天さんは、たまご、よう虫、まゆ、せい虫なので、トンボと天さんのちがいが分かって、とてもべん強になりました。

また、天さんがよう虫のときは、色が黄緑で毛が生えていました。

長さは8センチメートルで水は飲むし、木と一緒に育ちます。だっぴは4回です。まゆは、黄緑のきれいな形をしていました。せい虫のオスはアンテナが大きくて、メスのアンテナが小さいことがわかりました。

ほかの虫たちも知りたくなってきました。

「天さんを学習して」 八島ひとみさん

やぎぬまさんからよう虫の天さんをもらった時にお話を聞いて、がんばってそだてようと思いました。天さんは葉の細いエゾノキヌヤナギの葉をたくさん食べていました。天さんが大きくなると、葉を食べるりょうが多くなり、まゆの色は黄緑で、とてもエメラルドのようなきれいな色でした。

まゆになると葉を食べなくなりました。まゆになったらすぐに出てくるのかと思ったら、なかなか出てきませんでした。でも、まゆになってしばらくたったら、かたかたとえだを動かしていました。風がふいていないのに動いているのでビックリしました。

まゆが動くようになってから、2ヶ月ほどすぎたある朝の様子を見ると、天さんがせい虫になっていました。天さんのせい虫はとても大きかったです。羽の大きさは、13センチメートルで二重丸のようなもようがあり、色はやまぶき色と黒い線で、体が茶色っぽい色でした。それはメスでした。天さんは元気にとび回っています。とても勉強になりました。

「天さん」 石川 舞さん

はじめて、天さんのいる植木ばちを見た時、わたしはどこにいるのだろうと思いました。葉の色と似ているから分かりませんでした。でも、天さんを見つけて、わたしはこれが天さんなんだと思いました。でも、わたしは虫が苦手なので少し気持ちわるいと思いました。

天さんは、葉っぱをいっぱい食べるので、葉がどんどんへっていきました。水も雨のようにやらないといけなことが分かりました。そして、天さんは葉を食べてまゆになるのがすごいと思いました。



まゆから糸ができる事を聞いて、またおどろきました。糸も天さんと同じ色になるのかなあと楽しみです。そして、天さんの糸は、ふくやネクタイになって、ずっとのこっていくんだと思いました。

「天さん」 松本 幸太くん

今回、中川の天さんの会のやぎぬまさんから、三年生に植木ばちにうえられたやなぎの木と、その木につけられた天さんのよう虫をいただきました。天さんは、エゾノキヌヤナギなどのわか葉を食べて大きく育ちます。たまごからふ化して、50～60日間でだっぴを4回くりかえし、5れいでまゆをつくります。よう虫は、とてもけいこい心が強く、むりに木からはなそうとすると足がちぎれてしまうことがあります。

また、よう虫は水を飲む習性があり、わか葉を食べながら葉についた水を飲んで大きくなります。体の色は、はじめは黄緑色で、大きくなるのにしたがって緑色にかわり、きれいな緑色のまゆをつくります。

まゆの大きさは、メスで8グラム、オスで6グラムと大きく、そのまゆからとれた糸は黄緑色で、とても心がいやされる色です。そのまゆは「緑のダイヤモンド」とよばれています。

天蚕繭工芸体験教室開催される

昨年11月20日と27日の2回、八島事務長宅で奥様の恭子さんが講師となって、県内各地から会員のほか約40名が参加し、天蚕繭の工芸品加工教室が開催されました。参加者の中には、8月の夏休み観察会に参加した親子の参加も多くあり、ペンダント・ブローチ・ネクタイピンなどの製作を楽しんでいた



できました。天蚕繭は何重もの層になっており、平らな金型に合わせるため、加工しやすいように萌葱色が映える表層と白色の内層に割り、表層を包むように貼り付ける技術には参加者誰もが悪戦苦闘していましたが、それぞれ個性的な天蚕繭の独特の柔らかい薄緑色とぼかし表情のある作品ができ、この企画は好評でした。参加した会員からは継続して工芸講座を開設して欲しい声があり、八島ご夫妻は大いに張り切っています。

地域づくり・けんぼくネット交流大会で会長に大喝采

第10回標記大会が去る1月14日、年度内県北地方・地域づくりサポート事業に取り組んだ実践団体や関係機関及び一般参加者が会して、二本松市安達文化ホールに約200名が参加し開催されました。

基調講演では、当会員の大友靖子さんが「自分自身も楽しもう！まちおこし」の題で講演し、自ら主催してきた霊山農テク学校の実践活動や当会の活動にも触れた内容で、スライド映写した旦那さんのバックアップも光った素晴らしい発表でした。

続く実践事例発表では、数ある実践団体の中から当「りょうぜん天蚕の会」が選ばれ、柳沼会長はスライド映像もお構いなしに、ユーモアたっぷりに「天蚕飼育体験と天蚕繭の利活用を図る事業」という題で1年間の活動を熱く語り、会場を大いに湧かせました。発表が終わると、会場からは喝采とともに「会長は人間国宝級のゴールデンタン（舌）だ」との声があがるほどで、霊山町の評判が大変高まった感がありました。（八島・公）



初めての糸取りに挑戦

1月28日、霊山町の中川集落センターで柳沼会長をはじめ30人の会員が集い、天蚕の繭から糸を紡ぐ「糸取り研修」を初めて実施しました。

農業研究センターの瓜田章二氏（本会員）の指導を受けながら、私たちが丹精込めて生産した天蚕繭を約90度の湯で煮込み、繊維をほぐしたあと、特注で購入した糸繰り機にセットしました。緊張の中、機械のスイッチを入れると糸車が滑らかに回転し、十数個分の糸を次々と巻き取っていきました。

「うわー！きれいだねー！」私たちは天蚕特有の「もえぎ色の極上糸」を見つめて感嘆の声を上げました。傍らには昔活躍した木製手動の糸繰り機2台も据えられ、「昔取った杵柄」の婦人たちにより負けず劣らずの見事な糸取り競演が行われました。

研修は半日程度でしたが、私たちはかつての蚕糸王国霊山と先人の知恵と努力に思いを馳せながら、天蚕の会発足2年目にして「繊維の女王」を紡ぐことができました。（修）

（この「糸取り研修」は、平成18年1月30日の福島民報で大きく報じられました。）



グリーンツーリズム交流会 in 里山がっこう

&天蚕観察会 in 霊山こどもの村

と き 平成18年7月22日（土）、23日（日）

【今年度の本会主催大イベントの様子から】



柳沼会長と八島事務長



楽しい座繰り体験



我らが頼れる受付嬢様



石絵体験コーナーの様子



園児も大好き作品づくり



天蚕繭工芸コーナーの様子



即興エレクトーンおじさん



みんなで楽しくお料理コーナー



一生懸命よ、田舎料理



お話おばさん名人芸コーナー



勇壮・地元大石雪山太鼓



親子の皆さんと天蚕観察会



公ちゃんトリオ・緑の森コンサート



なるほど これが糸繰りか



天蚕はおもせゾイ
あんだらも、やらんしょナイ!



本物の色はきれいだね



スタッフのハイポーズ

【トピック】

りょうぜん天蚕の会ブランド名石鹸発売

これまで天蚕入り石鹸は有限会社アルマや㈱日正で発売されてきましたが、石鹸にふくまれる天蚕繭の成分分析等が明らかになったことから、りょうぜん天蚕の会のブランド名で製造・販売に踏み切ることになりました。

天蚕繭のタンパク質は極めて人間の肌に優しく、保湿力にすぐれ、殺菌作用もあることなどから、この石鹸は丸ごと繭を封じ込めた商品です。

使用者からは、小児湿疹が抑えられたとか、洗髪後のリンスは不要とか、草木負けのかゆみが無くなったという声が聞かれており、先ずは、会員家族に使用してもらい、その評価を得て周辺の人々に勧められる商品としたいものです。1個3千円ですが会員価格で是非お試しあれ。（八島）

【会員の声より】

天蚕はサイコー

二本松市 増子良一会員

緑の虫、エメラルドグリーンの繭、まれに黄色い繭もつくると、でも桑はたべないなんてびっくりです。かわいい顔、ずんぐりでユーモラスな感じ。今回の視察研修では、一生懸命生き残りにかけている姿に感動しました。今後は先進地とスクラムを組んで数年後には「天蚕全国サミット in 霊山」を開催し知名度を上げましょう。当会には学者は勿論、アーティストが沢山いるので「唄って踊って語って描いて」天蚕PRはバッチリですね。



携帯にもイナバウワー

天蚕のイナバウアー見事 ～四、五齢の山付け作業に参加して

福島市 中井恒峯会員

今年も鮮やかな萌葱色の天蚕に逢える！ 高鳴る気持ちを抑えきれない、平成18年6月11日（日曜日）自宅を正午に出発し、一路霊山・中川へ。天蚕に逢えると思うと、愛車の赤いカブチーノのアクセルも強く踏み込んでしまう。スピードが出て“あぶない・・・！”心静めて霊山に向かう！

午後1時には霊山町中川集落センター前に到着した。集合時刻まで1時間も早い。車の中で一休み。2時前になると、柳沼会長の奥様が出てこられた。そしてみんなも。



いよいよ天蚕とご対面！会長宅脇の飼育ハウスに、会員ら二十余名が集合した。このハウスには、4月23日に種付けされたエゾノキヌヤナギの青々と茂る葉に、4齢から5齢に成長した天蚕が飼育されている。

エゾノキヌヤナギに近づいてみると、若葉の中にまるであのトリノ冬季五輪フィギュアスケート女子金メダリスト荒川静香選手が魅せた「イナバウアー」のような姿をした天蚕がいた。ここにもあそこにもイナバウアー。天蚕のかっこうは面白い。私の描いた天蚕のイナバウアーをご覧下さい。

しばし楽しんだ後に、山付け作業をするため、天蚕の付いた枝ごと200匹ほどを捕獲した。それから山に車で移動、各班ごとにクヌギやナラの木に山付けをしたが、あっという間だった。

今日の成果は、荒川静香のようなイナバウアーを見せた天蚕に金メダルである。

今年为天蚕卵の山付けに思う

副会長 斎藤行応

今年为天蚕卵の山付け開始は4月下旬に始まり、2回目は6月上旬、3回目は8月上旬と3回行うことができました。

これまでの天蚕飼育について考えられること、一つは1回目の収穫は予定通りでしたが、2回目は山付けした卵数の割には思うような繭の収量が確保できず、予想したほど良くなかったようでした。この原因には、孵化率が悪かったものか、それともカエルや蜘蛛、またはネズミ等の被害にあったのか等、さまざまな原因があるようです。



一方、飼料樹のエゾノキヌヤナギについては、昨年に挿し木して今年で2年目になりますが、これ程までに旺盛な樹木とは思っていませんでした。ハウスの屋根の高さを1m以上も越えて伸びて、ネットからはみ出たところなど8月下旬に会員有志が剪定して一応は整理したのですが、今年为天蚕に必要なハウスは半分位で終わるのではないかと予想しています。このような現状のため、来年度への大きな研究課題として検討しなければなりませんので、飼育ハウスの有効利用を図り天蚕繭増産のため、天蚕卵の倍増に柳沼会長と二人、日々努力しているところ

です。

そのほか、いろいろな課題も沢山ありますが、会員皆様方のご協力をいただきながら一つ一つ解決していきたいと思っております。

なお、私事ですが、今年1月と6月に体調を崩し、入退院を繰り返しましたので、総会にも出席できず、また天蚕飼育にとって大事な時期に休んでしまい、会の皆様にはご心配等をお掛けしましたこと、本当に申し訳なく存じております。

新会員紹介

今年度には次の方々が会員となりました。

阿久津チヨさん（伊達市霊山町中川）

菅野 久代さん（伊達市霊山町中川）

八島 時男さん（伊達市霊山町掛田）

八巻 繁雄さん（伊達市霊山町掛田）

佐藤美由紀さん（伊達市保原町二井田）

いずれの皆様も萌葱色の天蚕繭や糸の美しさに惹かれて、春から様々の活動に参加されています。

平成18年度地域づくりサポート事業に係る今後の主な事業計画

・つむぎ生産と織物研修会開催

と き 平成18年11月10日予定

研修先 山形県白鷹町・川俣町～つむぎ織り等の受講、地元伊達市保原町～真綿づくり

・天蚕生糸生産及び特産織物の開発

時 期 平成18年11月上旬～12月下旬

場 所 和紙工房やしま ほか

内 容 古い機織り器を2台修繕し、天蚕糸を使用した織物を試作します。

【シリーズ：養蚕業を振り返る】

第2話 「蚕が温度虫と言われたゆえんとは？」

昔から家蚕は「温度虫」と言われてきました。これを、裏付ける貴重な資料が地元にあります。ご承知のとおり霊山町は養蚕業が昔から盛んであり、霊山町史において、江戸時代中期の人物で「佐藤友信」は特に有名です。友信翁の著した「養蚕茶話記」（1766年頃）は、すぐれた養蚕指南書として当時広く知れ渡っていたようです。この「養蚕茶話記」を垣間見ると、当時は正に飼育日誌を基礎に飼育目標日数を設定し、著者の経験と感性をもって養蚕指導書をまとめたようすが伝わってきます。

その著書の始まりの一部に、「養蚕の術、専ら是に等し。第一陽気陰気の取扱肝要なり、（中略）、蚕は陽虫也。（中略）雨湿のわる寒き陰を嫌ゆえ、火をもつて陽気をとる也。云々」とあります。

この著書は、当時から冷涼な時期には炭等で暖をとり、しかも風通し良い環境を大切にしよう説いています。また家に入ってくる風向きで飼育にとって善し悪しがあること、あるいは湿気や冷気を避け、さらには眠のときに桑に埋もれないよう注意を促しています。

昔は、蚕種の自然ふ化で飼育が始まったと思いますが、春蚕では梅雨時期に18度C以下となる低温に遭遇することがあります。低温が続くと蚕作は著しく悪くなり、さらに飼育期間も大幅に延長し、繭の収穫量もかなり落ち込みます。

現在では、稚蚕共同飼育や保温管理が徹底されているため、春蚕の標準飼育期間は概ね27日が目標となりますが、江戸時代では飼育期間がもっと長く「養蚕茶話記」では具体的に40日～45日を飼育日数目標とし、それに当てはまるよう火を用いる必要性を説いていたのです。

このように、養蚕農家が安定した繭生産をするためには、低温時の保温を昔から行ってきたことが理解されます。外気温で蚕作が左右されるこの家蚕を、保温で安定させようと努力した先人の気持ちが、「蚕は温度虫」ということばに深く刻まれているのでしょう。（公）



【次回：世界に誇る養蚕技術とは】

編集後記

子や孫は「目に入れても痛くない」と言われるように可愛さの代名詞ですが、今年は私たちの「天蚕」にとっても正にそのとおりだったと思います。初めて目にした時はギョッ！として後ずさりするほどでしたが、今は見れば見るほど可愛いし、イナバウアースタイルは愛嬌たっぷりです。皆さんもそう思う様になったでしょ？

今年は春からハウス内に種付け、山移し、町内各小学校とりょうぜん子供の村での飼育、繭の収穫、繰り糸体験、地域交流会、新聞・ラジオ・テレビ局の取材など、話題の多い年でした。そして多くの方々から寄稿いただき、楽しく編集することができました。

今回は2号・3号の合併となり恐縮に存じますが、今後も身近な話題を織り交ぜて編集に当たりますので、積極的な参画をお願いします。

なお、この度寄稿いただいた皆様に感謝しまして編集後記といたします。（修・スタッフ一同）



みんな仲良く乾杯！